いまは山頂から北方の展望はよい。『紀伊国名所図会』には、「[6]修験道の行所なり。……登攀頗る苦めり。最高頂にいたれば、古松蓊蔚たる中に、兒の松といふあり」とあって、謡曲「谷行」に峰入の修行に、松若丸という小児が修行した善孝の物語があり、この山と結びつけて『図会』に記されている。

直川の観音さん

さて、大福山の奥ノ院にあった千手寺は、麓の本恵寺に移り「直川の観音さん」として里人に敬われている。

『本恵寺縁起』には、「[7]文武天皇大宝二年（七〇二）役ノ行者開基なり。往古は五十町餘北の方、山中弁財天の窟にあり、其山を大福と称す。其の後、由良の興国寺の開祖、法燈国師、感得の霊夢に依て正安元年（一二九九）龍實禅師に附命し、今の地に移し是を中興開基とす。天和三年（一六八三）水野土佐ノ守、官に白して法華に改宗し、新宮本廣寺日忠上人を請して開会し本恵寺と改む」とある。鎌倉時代の執権、北条貞時のころである。

本恵寺について、『紀伊国名所図会』は、「[8]日蓮宗身延門派、新宮本廣寺に属す。本堂千手観世音、立像にして、長三尺一寸、役行者の作

本恵寺の観音堂

⑥復刻版一巻四一〇頁。
⑦『紀伊続風土記』復刻版第一輯一九三頁。
⑧復刻版一巻四〇一頁。

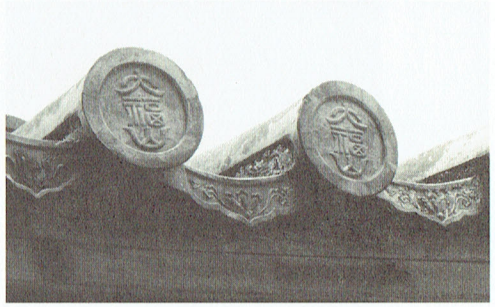
なり」とあり、「開山堂、経堂、六所権現社、鐘楼、僧坊、仁王門、辨天社、薬師堂、妙見堂」が列記されている。

JR六十谷駅から千手川にそっていくと、橋を渡った所から山内に入る。石段を登ると朱塗りの仁王門がどっしりと建ち、両方に仁王像がたっている。あたりは桜の老樹である。石段の右に元禄三年（一六九〇）建立の日蓮宗寺院の「南無妙法蓮華経」の石碑がたっている。

境内は広く、『名所図会』に記された建物は備わっている。丸瓦にも「大福山」の記号があり、昭和七年（一九三二）の和歌山若櫻講の大峰登山の五十度供難碑がある。

また「延宝七年（一六七九）三月十八日、葛城山下千手寺堂前」の灯籠がたっている。

本堂には、明治六年（一八七三）九月の和歌山区妙法講社、開元組の扁額が掛かっている。



本恵寺の丸瓦

六、桜地蔵と滝畑・落合の里

落合から滝畑の里

修験の道は、雲山峰から青年の森を通って、東へ流れる川にそって落合、そして滝畑の里に向かうのである。

小川にそう道は、水田や畑が細長くつづき周囲は山里という印象が深い。わずかに五戸の民家しかない落合の里は、『紀伊続風土記』に「八王子社、境内周五十二間、本社、廳、鳥居、末社一社。村中にあり一村の氏神にて山伏の行所なり。祭礼九月十日」[1]とある。

この社は明治の神社合祀によって、山を越えた山口神社に合祀されていまはない。わずかに自然石をまつり、灯籠や文化元年（一八〇四）の手洗石が残るにすぎない。その奥に無縁仏がある。

向井家の『葛城峯中記』には「落合村八王子社」とあり、落合村庄屋喜惣兵衛宅で宿泊した記録がある。

落合の八王子社

①復刻版第一輯二〇九頁。

落合から川にそって滝畑に入ると、里の西に玉垣で囲まれた春日神社がある。

境内は昼なお暗い森で、背後の山からの小流は滝となり由緒ある石祠や石碑がたっている。『紀伊国名所図会』には「おとなしの滝」[2]と「不動」が描かれ、『紀伊続風土記』も「村の乾の方、二町許瀧谷といへるところに瀧より、高凡一丈許、又二の瀧といへるあり、葛城峯中記に嘘吵瀧と見ゆ修験者の行所なり」[3]とあり、また「瀧不動堂」について、「瀧の上にありしか今は常願寺の薬師堂に遷したり葛城峯廻り修験者の行所なり」とある。その跡は畑地となっている。

また春日神社の境内には、「不動瀧、燈楼瀧畑村、宝永六巳丑年二月二十八日」の灯籠がある、境内の西側山麓には八基の板碑がある。

いずれも滝畑村民の庚申供養塔や逆修[4]を目的としたものだが、右から天正八年（一五八〇）、正平一三年（一三五八）、慶長一七年（一六一二）、寛文一一年（一六七一）、慶長一七年（一六一二）、元禄七年（一六九四）と年号は古い。

滝畑の里は、雄山越えの官道が通る。平安時代には京都から和泉・紀伊を結ぶ南海道が紀伊国府[5]に入り、また熊野三山への熊野古道の道、さらに江戸時代には城下若山からの上方街道が通った路である。滝畑の里は、いまは雄山トンネルによってJR阪和線や峠越えの阪和自動

②復刻版一巻三六〇頁。
③復刻版第一輯二二五頁。
④生きているうちに、あらかじめ（逆）自分のための仏事をして（修）冥福を祈ること。
⑤和歌山市府中の地と推定されている。

滝畑の板碑群

車道がつき、ここが紀泉を結ぶ重要な葛城山系の鞍部となっている。

里の入口には、熊野古道の九十九王子の一つ、「中山王子址」の標示板がある。この王子社は、もと金剛童子であったという説もある。また北へ行くと江戸時代の山中渓の宿場があり、いまに街道の面影を残している。

桜地蔵の古い経塚石

滝畑から山中川を少し下がると、東から境谷の小川と合流する所に、葛城二十八品の⑥信解品第四の経塚がある。境谷へ入る道の左手の山腹の段を登ったところに自然石と経塚の白いポールがたっている。

経塚は、和泉砂岩の自然石で、高さ一㍍三〇㌢で、キリーク（阿弥陀如来）の梵字の下に「文安五年（一四四八）八月十五日」と刻され、葛城二十八品経塚のなかで最古の年号である。

もとは、この場所より西の崖の上にあり、地蔵堂跡や桜の大樹があり、昭和三一年（一九五六）に山中渓の小川清氏が発見したといわれるが、阪和自動車道ができ現在地に移転した。経塚のあたりは、桜やネムの木などの雑木林で日あたりはよい。木箱には、那智山・当山派・犬鳴山の碑伝が奉納されていた。

⑥心から信じて感謝し、仏法を求める教え。

桜地蔵の経塚（右）と文安五年銘の碑

元禄一三年（一七〇〇）の亮永の『葛城峯中記』に「入江宿、西宿とも云。宿着童子、盧檀有り。信解品第四」とあり、鎌倉期の『諸山縁起』や、安土桃山期の『葛城峯宿次第』、さらに幕末の『葛嶺雑記』にも同じことが記されている。

境谷への路傍に「桜地蔵」の標示板がある。「桜地蔵」について『葛嶺雑記』には、「入江宿除蔵王」として、「かつらぎ御修行の節、先達中はじめ一同御改めの事実明かなり、此所に老木の桜あるが故に、さくらぢざうといふ」とあり、「さくら地蔵を三十歩斗ゆきて梵字石あり、妙信解品第四之地」と記している。

なお、ここから北へ国道にそって山中渓に入る所に、近世の「山中関所扯」と書かれた標示板と自然石が跡地をとどめている。その上に桜の木があり、その根元に、永禄一二年（一五六九）九月、浄泉による七世父母と六親眷属の供養所と記された石碑がある。その背後の桜の木に那智山や犬鳴山の碑伝が貼られている。

第四経塚は、境谷への桜地蔵と山中渓の関所跡の二説があるが、やはり文安五年（一四四八）の梵字のある境谷のさくら地蔵がふさわしいのである。

境谷の里からは、東の槌ノ子峠越えで泉南市の楠畑から押川への修

桜地蔵と境谷への道

山中渓の供養碑

験の道が開かれている。境谷の里は、江戸時代からの温泉の村であった。古い地形図には温泉の記号があり、『紀伊続風土記』に「[7]村の南四町許に井あり、水も温かならざれども硫黄の気あり、正徳（一七一～一五）の頃、水を温めて病人を浴せしむ。今は其事なし」とあって冷泉があった。いまも道の下に井戸が残っている。

また「金剛童子、村の南半里許、狼谷にあり、山伏の行所なり」と記されているがいまは不明である。ここからは根来寺と押川の里へのいくつかの修験の道があった。

境谷の村中の家の石垣に、四石山へのハイキングコースの案内板と、「葛城二十八宿経塚巡行、槌ノ子峠越、楠畑、押川・根来」の標識板があって分かりやすい。山道を登ると、槌ノ子峠にも経塚巡行の標識と、「和泉山系六〇KM縦走コース、大阪府勤労者山岳連盟」の案内板がたっている。

しかし、楠畑から押川・根来への道は、土砂採取で山は崩され、また風吹峠トンネルを通る国道の交通量も多く歩行は不可能となった。

境谷の里

⑦復刻版第一輯六〇四～五頁。

七、根来寺と押川の里

修験に始まる根来寺

桜地蔵の第四経塚から、次の倉谷山の第五経塚へは、途中の根来寺と押川の行所をへて谷ぞいに巡行した。

鎌倉初期の『諸山縁起』や室町初期の『葛城峯中記』、安土桃山期の『葛城峰宿次第』など、ともに根来寺・押川の順に記されている。

コースを詳しく記した元禄一三年（一七〇〇）亮永の『葛城峯中記』によって、大まかには桜地蔵から境谷をへる「カジロ峠」コースと、雄山峠に近い谷から入る「郷ノ峠」の二コースが記されている。このほか槌ノ子峠から楠畑をへて楠峠越えのコースもあったと考えられる。この付近の地形はきわめて複雑で侵食谷が多く、これらを経ていくつかの巡行路があったのである。

根来寺は、覺鑁上人が高野山から保延六年（一一四〇）、この根来の地に

境谷よりカジロ峠への道